

審査員特別賞・地域文化SDGs賞

栃木県立真岡 商業部
北陵高等学校

耕作放棄地の解消と再生



活動期間 2023年4月～ (30回ほど活動)

構成人数 高校生6名

SDGs テーマ



推薦メッセージ

取り組み内容は、耕作放棄地解消に向けた地域課題解決のための研究で、SDGs目標2「飢えをなくし、だれもが栄養のある食料を十分に手に入れられるよう、地球の環境を守り続けながら農業を進めよう。」に合致したものである。これは、ざぶんSDGs大賞展の参加資格に該当するため推薦する。

栃木県立真岡北陵高等学校 校長 橋本 智

活動内容

①農地再生作業

高校がある下籠谷付近の放棄地の日照等の耕作条件を調査し、刈払・抜根などの作業が可能か等を検討し土地の選定し、再生作業に取りかかった。

手順1 刈払機およびバロネス（草刈機）により草を刈る。

手順2 トラクターを利用し、土を耕す。

手順3 土作り（綿は酸性土壌をきらうため、作付けの1週間前に石灰を加え、土を中和した。）

②作付け、病害虫対策、収穫作業

種は真岡在来の種とし、病害虫対策を十分に行い、綿花の収穫を実施した。摘み取れた綿花は乾燥後に種を取り出し、糸として紡いで機織りをした。

③木綿の染色

高校生が好きな暖色系の染色を実施した。特に真岡市の特産である苺を使用した染色を試みた。これらの苺は、粒が小さかったり痛んだりして市場に出せないものを使用した。

活動内容

④ 試作品の作成、学校祭や産業フェアでの見本品の展示および購入意向調査

染色された真岡木綿が革との相性が良いことから、益子町の革工房「maharo」に依頼し財布やパスケースの試作品を作成した。真岡木綿はデザインのアクセントとして使用し、学校祭や産業フェアで展示し、色や値段等について意見をいただいた。この意見をもとに再度改良を加えた。



01.活動をはじめたきっかけ

整備されていない農地を 有効活用して地域の活性化に

真岡市では農業者の高齢化や後継者不足による労働力不足、相続等により農家以外で農地を所有する人が増えたことなどにより、整備がされていない農地や土地条件が悪い農地を中心に耕作放棄地が散見される。耕作放棄地の存在は、農地の有効活用上の問題ばかりでなく、病害虫の発生源、有害鳥獣の隠れ場、不法投棄の温床になるなど、地域環境に悪影響を及ぼす。また、美しい真岡市の景観を損なう要因にもなる。このようなことから、耕作放棄地の解消・再生は重要な課題となっている。そこで、放棄地の有効活用策として綿の栽培と、収穫された木綿を使用して高校生向けの革製品（財布やパスケース）の製造・販売に取組み、地域の活性化に繋がりたいと考えた。

02.活動から学んだ・感じたこと

地域の人たちと関わり 社会貢献への意識が向上

耕作放棄地の解消・再生ができないかという疑問から始まった一連の活動を通して、成果として

- ①本校の他学科（農業学科）の学習内容を理解できた。
- ②地域の人との触れあいの見本となるような人々との出会いや郷土愛、社会貢献意識の意識向上に繋がった。
が挙げられる。

また反省点として、できた商品売るためのターゲット決めや、その商品を知ってもらうための広報、価格や見た目、消費者の心理を読み取ることの重要性を感じた。

03. 継続するためのこれからの工夫

活動を学校全体へと広め、 地域との関係を深めていきたい

私たちの目的は遊休農地を少しでも減らし、よりよい環境を維持することにあります。この活動の成果により、真岡木綿の需要が増えることで、より多くの綿花の栽培につなげることが今後の目標・課題になります。また、綿花の花を1本でも増やすために、商業学科以外も含め学校全体で遊休農地による綿花の栽培を行い、よりよい環境になるよう、さらに活動を深めていきたいと考えています。今後は、木綿の種の配布等を含め活動を広げ、地域との関係を深めることが次の活動を生み、地域の人々の叱咤激励が活動の持続につながると感じています。

活動の略歴

令和5年	4月	研究開始
	4月～	農地再生作業
	5月	
	6月～	作付け、病害虫対策
	7月	
	9月～	収穫作業、染色、試作品の作成
	10月	
	11月	学校祭や産業フェアでの見本品の展示および購入意向調査
	～	